

D-3 名取市北釜地区

2012年1月24日(火)

報告者名	沼田 愛	被調査者生年	1940年
調査者名	島村 恭則	被調査者属性	現、名取市美田園第2・第3区長。震災前は北釜区長。
補助調査者	沼田 愛		

北釜地区の概要

北釜地区は仙台空港の東側に位置する。海岸からは、砂浜と、国有林・県有林・市有林からなる防風林に隔てられている。地区は109戸から成り、そのうちの農家は70戸で、専業農家36戸、第二種兼業農家が34戸である。下増田第二臨空公園の北側にある2、3軒も北釜地区の住民で、空港東側にある家からの分家である。

地区内の高橋姓7、8軒はすべて親戚関係で、星姓も同様である。櫻井姓は3つ、森姓はいくつかの本分家関係に分かれる。安部姓は、本家とベッカの2軒だけである。話者の家では、ベッカを2軒出している。

現在の仙台空港は、北釜地区の住民が開墾していた土地を、数回にわけて買収し、整備したものである。仙台空港の土地は、戦前に話者の親の世代が区割りして開墾した農地で、桃畑があった。この桃は砂地での生産であるため、味があまり良くなく、缶詰用にしていた。話者の自宅は、この農地を売って得た300万円で建てた。

現在滑走路になっているあたりは、戦後満洲などからの引き揚げ者が農民になって入植した際、地区の長老（契約会会長など）が決めて、1軒あたり5反歩くらいの土地を無料であげた。引き揚げ者のことを、北釜地区では帰農者と呼んでいる。貞山堀の西側にあった田圃は水はけが悪く、水がたまるので、魚取りをした。ここが、一区画5反歩くらいの田圃だった。現在は駐車場になっている。

震災後の状況

震災により、住民約400名のうち53名が亡くなった。この53名と、地区外の住民だが北釜で遺体が見つかった1名の、計54名の合同葬儀を、下増田小学校の体育館で行った。合同葬儀の際には、下増田の東光寺の住職に法名をつけてもらい、無料で捧んでもらった。遺骨も東光寺に預かってもらっている。話者の家族は震災で亡くなっていないため、盆に特別に供養する行事などは行っていない。

平成24年1月29日に、第1次防潮堤新築式があるので、区長である話者は出席する予定である。第1次防潮堤は海岸に近いところにつくられ、高さ5.4メートルの第2次防潮堤は空港の近くに建設される。防潮堤が整備されても、北釜地区の住民は集団移転し、農地ももとの場所にはつくらない予定である。観音寺を現在地に再び建てるかどうかは、まだ決めていない。

震災後、北釜地区があった土地を買い取りたいという話が複数きており、区長である話者が窓

口になってその対応をしている。しかしどの会社も土地の金額を言わないので、決めようがないという。これまで、ポートレース場、花卉の球根栽培、放牧地とチーズ工場などの建設の話が来ている。また、震災前から、仙台空港に荷物を運び入れる貨物ターミナルの場所にしたいという話もあった。ずっと断ってきたが、北釜地区が集団移転することで、貨物ターミナルにする計画にも土地を狙われている。以前、北釜地区の住民のなかで、空港利用者をターゲットにしたカジノを建設しようという構想も持ち上がっていたが、この構想は不安要素が多く、取りやめた。

地区の自治

長老とは、地区の自治の采配をするひとのことである。契約会会長、村会議員などの役職者や、地区外とも関係性があるひと、土地を多く所有しているひとなどが、長老になることができる。

契約会は、加入や脱退の年齢が決まっているわけではなく、親が体調を崩したときなどに世代交代をする。かつて、契約会の集まりには、紋付きの袴姿で参加した。40年ほど前に契約会は町内会に改められ、震災後は仮設住宅に入居した住民で自治会を結成した。

話者の活動

話者は北釜地区の区長を務めて3年目であり、その前は町内会の会長を7年間務めた。仙台空港ターミナルビルも行政区としては北釜地区に入るため、話者はターミナルビルのテナントにも市からの配布物などを配る仕事があり、空港内によく出入りした。また、区長は地区内で葬儀があると弔辞をよむ。ひとつの葬式につき香典などで1万5千円ほど払うが、親戚関係にない家の葬式にも出席するため、葬式がある度に出費がかさんだ。

話者は仮設住宅が完成する前の避難所での生活のころ、北釜地区の住民を3回ほど集め、北釜に戻りたいのか、他の所に移転するならどこがよいのか、などと聞いて意見を集めた。その結果、集団移転をすることに決め、行政に報告した。しかし、まとまった農地を確保することは難しく、移転先はまだ決まっていない。

畑作

話者は、平成23年7月から国の補助を受け、白石市に120棟のビニールハウスを借り、チンゲンサイを生産している。今後はビニールハウスで栽培したものをカット野菜にして販売することをメインにしたいと考えている。

ビニールハウスは、以前北釜のひとたちが、刺身のつまにするダイコンを卸していた食品会社から借りているものである。話者は、食品会社が北釜の人たちに支払いができなかった際に、会社に代わって北釜の人たちに払ったことなどがあり、この会社から懇意にされている。北釜は野菜の産地であるが、白石市は野菜を市場に出すことがなかった。そのため、話者は講習会などで白石市の農家に野菜の生産のノウハウを教え、ブランド化させることを白石市長にも期待されている。

話者は昭和53年頃、北釜の野菜出荷組合の組合長をしていた。各家で生産された野菜は、夕方に北釜地区北部にある農協北釜野菜集荷所に集められた。

北釜地区は沿岸部にあるが、塩害はあまり気にしていなかった。震災前は幅10メートルほど

の防風林で潮風が遮られていたからである。しかし、現在は防風林がないので、潮風は畑作によくないと考えている。

震災前、話者は農業用ハウスを 40 棟、土地面積にして 80 坪から 100 坪程度の農地を所有していた。田圃も所有しているが、これは 20 年ほど前から遠い親戚に貸している。

稲作と畜産

むかしは牛を飼っており、稲作に用いた。牛よりも馬の方が、農作業が早く適していたが、牛は売ることができたので、多くの家では馬ではなく牛を買った。北釜地区内で馬を飼っていたのは、経済的に余裕のある 3 軒ほどだけだった。飼うときには雌の牛の方がよく、生まれた子牛や育った肉牛は北釜に来るバクロウ（博労）に売った。

牛は、田の中をまっすぐに歩けるようになるまで、3 年ほどかけて訓練した。数頭の牛に鋤を惹かせて競争するような大会はなかった。

北釜地区の社寺

話者がかつて年配者に聞いた話によると、観音寺には以前池が 4 つあり、4 つの池は南側から見ると「心」という文字に見えるように配置されていた。その池は、仙台空港アクセス線が建設されるときに埋めてしまった。このときは、行政の主導により、池の埋め立てとともに、観音寺と下増田神社の境内をかさ上げしたり、ゲートボール場を造ったりした。

下増田神社の本殿は、津波により流されてしまった。神社の宮は、話者が小学校 2、3 年生の頃に、牛にひかせた馬車（話者は馬車と牛車と両方用いた）に空港神社の宮を引かせて移築したものである。

下増田神社は毎年 4 月 15 日が春のまつりであったが、現在は 4 月の第 3 日曜日に行っていた。秋は（11 月の）第 4 日曜日くらいにある新嘗祭である。

山の神神社には、他の地区からも歩いて参拝にくるひとがいた。山の神神社にはまつりはなく、下増田神社のまつりしかない。

千体地蔵は、小さい土人形が 15 段くらい並んでいたもので、年に 1 回まつりがあった。そのときは子どもに餅を食べさせたりした。千体地蔵には、北釜地区の住民のなかで、子どもを亡くしたひとなどが参拝した。

盆踊り

8 月 13 日に北釜の集会所の庭で盆踊りをやった。これには、農協青年部が空港周辺の草刈りをするこで得る、年間 100 万円ほどの収入を用いた。